

セクシャルスクール完結後短編集2ーサンプルー

A V の話

里実は、昼食の載ったトレイをテーブル席に置いた。
座りながら話しかける。

「そういえば先生、以前藤田先生が言っていた……
えっと」

「ん？」

「……なんでしたっけ」

首を傾げると、正面に座った須坂が隠すことなく苦笑した。

「俺に訊かれてもわかんないけど。でも藤田が言っていたことなんだよな？」

「はい」

「じゃあどうせろくでもないから忘れていいぞ」

（どうせろくでもない……）

ぽかんとしている里実に、須坂が片眉を上げた。

「あいつが実のあることを言ったためしがないだろ」

そうだっただろうか。

そんなことはない——と思うが、実際里実も藤田の
どんな発言が気にかかっていたのか忘れてしまっ
た。

「なになに、俺がかっこいいって話？」

「ほらな」

トレイを持った藤田が、須坂の隣の席の腰を下ろした。

須坂が眉間にしわを寄せる。

「こっちくんなよ」

「幼稚園児みたいなこと言わないでください。俺が里実くんの隣に座ったら、須坂先生の顔見ながら食べることになるじゃないですか」

「別のテーブルに行行って言っただよ」

仲良しだなあ、と思いつながら手を合わせて食事を始める。

ふわふわのがんもどき。じゅわ、と甘い汁があふれておいしい。中にはひじきと豆も入っていた。

「――で、俺がどうしたの。里実くん」

「あ、えっと、前に藤田先生が言っただことが気になつて」

「なんだろう？ 須坂先生と別れて俺と付き合うって話？」

「してねえだろ」

「するとしたら須坂先生がいない時なんですから、須坂先生は知らなくて当然です」

「そもそも別れるつもりなんてない」

「交際っていうのは双方の合意で成立するんですよ」

「そのままそっくりお前に返す」

「告白するのは自由ですけど」

「告白された里実が俺に言わないわけないだろう」

「口止めされたかもしれないじゃないですか」

「顔に出る」

藤田が里実を見た。

「……まあ」

「だろ」

里実は何も言えず、ほうれん草のごま和えを口に運んだ。

（……なんだっけ）

藤田の発言——いったい何が気になっていたんだっ
たか。

考えながら五目御飯を食べていると、ひらめいた。

「あ！」

「どうした？ 舌でも嚙んだか」

「いえ、思い出しました。藤田先生、A Vの射精がどう
とかって」

藤田がしばし動きを止めた。

「——あ、わかった。思い出した。あれね、A Vの中出
しの話」

「そんな話したか？」

「しまったよ。俺が里実くんとセックスしてる時」

くく略くく

養護教諭（スピノフ）

二十二時半を回った。

寮の保健室を施錠した藪下陽一は、動きを止めた。

さて、どうしようか――。

いつもだったらへらへらした顔でやってくる藤田が、今夜は顔を見せなかった。

今日の昼に会った時は普通だった。

しかし藤田の気持ちを流し続けるのも――藤田が藪下に流され続けるのも、もしかしたら限界なのかもしれない。それならそうつとしておくべきか。

一方で、体調を崩していたらという心配もあった。

（もし、藤田先生じゃなかったら……）

他の教師だったら。生徒だったら。毎日来ていた子が、前触れもなくやってこなかったら。そしたら、確実に様子を確認しに行く。

藪下は藤田の部屋に向かった。

ドアの前に立っても、本当に尋ねていいものか悩んだ。下手に期待はさせたくない。

（まさか押してダメなら引いてみる戦法じゃないよな）
頭のいい子だ。策略を巡らせていてもおかしくはない。でもそんなことをするだろうか。藤田はストレート

に思いをぶつけてくるような気がする。

(…：倒れてたらずいし)

インターフォンを押す。

数秒待つ。

もしかして本当に体調が悪いのだろうか――焦り始めた時、ようやくドアが開いた。

「あ――先生」

濡れた髪。首に掛けられたタオル。どうやらシャワーを浴びていたらしい。

きつと、誰かと楽しんでいたのだろう。だから保健室に來なかつたのだ。

新しい恋を見つけたのなら、それが一番いい。

「保健室に來なかつたから、倒れてるのかと思って。元氣そうでよかつた」

「あ…：うん、大丈夫。ありがとう」

「じゃあ、おやすみ」

自室に戻ろうと踵を返した時、手首を掴まれた。

「っ…：」

「あ――ごめん」

セックスの名残だろうか。熱を持った手が離れた。

「体力使ったでしょ。早く寝なね」

藤田が首を傾げた。

「体力？」

あまり言及すると、嫉妬していると勘違いされるか

もしれない。

「金曜だし。一週間分の疲れ」

「ああ……まあね。さっきもネコクラスの子の宿題手
伝ってきたし」

「人気者は大変だね」

「そりゃあね。なんたってこの顔だから」

「へえ」

冷めた目で見てやると、藤田は笑った。

「大変なのは本当だよ。乳首いじりの宿題でさ、いじつ
てあげただけだ。こっちはマナーとして勃起させた
んだけど、物欲しげな目で見られちゃって」

「あれ、据え膳食わぬは男の恥じゃなかった？」

「相手はネコクラスだよ？ まだ処女」

「あーそっか」

「本当はこの後保健室に行こうかと思ってたんだ
けど。コーヒー飲みに」

「は？」

「ギラついたままは行けないでしょ」

くく略くく

夏休み

「里実くんの夏休みはここね。しぶしぶ、不承不承、いやいやだけど、須坂先生の休みと合わせておいたから」
おかず兄から渡された八月のシフト表。早番の日、遅番の日、休みの日がばらばらに並ぶ中、三連休が二回あった。それが夏休みということだろう。

「ありがとうございます」

おかず兄が隣から里実のシフト表を覗き込んだ。

「ちなみにこの日は俺が午後休みだから、アナル舐めさせてね」

それを聞いた他の調理員が苦笑する。

「これこれ、おかず。須坂先生に怒られるよ」

「今いないもん」

「いるが？」

大好きな声が聞こえて、里実は勢いよく振り返った。カウンターの外に、ジャージ姿の須坂が立っている。

「須坂先生！ どうしたんですか！」

「……なんで？ ねえなんで出てくんの？ どこから湧いてくんの？ コバエなの？」

里実がカウンター側に駆け寄ると、須坂が里実の頭を撫でた。

「グラウンドの予約がブッキングしてたらしくて、

サッカーが中止になったんだよ。小学生の試合らしくて、じゃあ譲るしかないなって」

「残念でしたね」

「いや、よかったよ。里実にセクハラする馬鹿から守れて」

須坂がおかず兄を睨んだけれど、おかず兄は首を傾げた。

「誰のこと？」

「お前だおかず」

「違うよ、俺の名前は蜜蜂菊座衛門だよ」

「里実、そろそろ間食の時間だろ」

「あ、はい……そうですけど……」

無視でいいのだろうか。

けれど里実には、二人を仲介できるほどのコミュニケーション能力はない。

里実たちの様子を見ていた調理員の一人が、苦笑しながらお皿を持ってきてくれた。

「はい、里実くん。今日の間食はおいなりさんね。マドレーヌはみんなと同じおやつ」

「ありがとうございます」

受け取って、飲食スペースに出る。

「須坂先生、何飲みますか」

「サッカー用に用意してた水筒のお茶があるから」

「あ、そっか」

テーブルに着くと、手を差し出された。

「はい？」

「シフト表。出たんだろ」

「あ、はい」

ポケットに入っていた紙を須坂に渡し、手を合わせてから食べ始める。いなり寿司は二つだけけど、サイズが大きい。頑張らないとマドレーヌまで食べきれない。

「ふうん……どこか行くか」

「どこか」

「デート」

「デート！」

「遊園地とか——あ、海とかプールとか。この日は花火大会があるから、見に行ってもいいし」

「わ、わ！」

すごい。夏だ。小学校の時、みんなが夏休みの宿題の絵日記に書いていた過ごし方。

「せっかくだから泊まりで行くか。昼は海で遊んで、夜に花火大会。あ、近くで祭りもあったな」

「すごいです……！」

行事がたくさんだ。

「日程ちゃんと調べてスケジュール立てておくから、空けておけよ」

「用事とか、何もないです」

空けるも何も、入れるものがない。

「じゃあ体力つけておけよ。海は疲れる——っていう
か里実、泳げるのか？」

「え……」

泳げるはずがない、と須坂もすぐに気付いたよう
だった。

「明日休みだろ。浮き輪買いに行くか」

〃〃略〃〃

おかずとサル（スピンオフ）

「——で、二十二歳です。これからよろしくお願いま
す」

「あだ名とかないの？」

訊いてきたのは、前の席の子だった。

「え……あ……サル……って呼ばれてました」

サル。人と目が合うだけで顔が真っ赤になってしま
うから。それがまるで猿のようだから。

「ふうん。よろしく、サル！」

自己紹介の時、どうしてあだ名なんてないと言わな
かったのだろう——。

サルはとぼとぼと廊下を歩いた。

セクシャルスクール。性を学ぶ学校。

入学を申し込んだ時は、半ば勢いだった。どうせ合格するはずもないと思っていた。けれど審査が始まってしまつて、引っ込み思案な性格ゆえに断ることもできないまま結果が出て、入学してしまつた。

「はあ……」

「サル！ どうしたの、ため息なんてついて」

サル自身、動物の猿に悪い印象は抱いていない。クラスの子も、意地悪でサルと呼んでいるわけではないとわかっている。小中高のクラスメイトとは違って――。

「あ……いえ、別に……」

「お昼、混む前に行こうよー」

「あ、はい……」

「敬語いらないって！」

サルの腕を引っ張る彼のあだ名はウサギ。由来はもう、忘れてしまつた。苗字がウサギに近い音だったか、もしくはウサギが好きだと言つたからだだったか。色が白くてかわいらしいから周りがそう呼んだのかもしれない。

ウサギとサル。

正反対だ。

ウサギはいい子だと思う。ただサルが、サルと呼ばれていたと言つたからそう呼んでいるだけだ。問題は、サルが、サルと叫ばないでほしいと言ふことができることだ。

「今日のご飯何かなー。お肉がいいな。サイコロステーキとか食べたいな」

さっきの授業が早めに終わったので、食堂はまだがらんとしていた。ウサギがウキウキでトレイを持ち、カウンターに向かう。

最初にいるのはおかずの配膳担当、おかず兄。名前は知らない。ただみんなおかず兄と呼んでいるし、初めて会った時も「おかず兄と呼んで」と言われたのでおかず兄と呼んでいる。

（自分で気に入ってるあだ名だったらいいよなあ……）

おかず兄は、いつだって楽しげだ。みんなにおかず兄おかず兄と慕われ、おいしいご飯を提供してくれる。

初めておかず兄に会った時、サルはそのあまりの顔立ちの良さに驚いた。目が合っただけで顔が熱くなってしまうので、それからはずっと下を向いたまま並ぶようにしている。

「おかず兄！ 今日のご飯はなんですか！」

「トンカツう！ でもその前に貞操帯見せてね」

「やった！ お肉う！」

ウサギがカウンターに登り、制服のシャツを捲って股間をさらした。

一年生は、貞操帯を見せる。そこに印字されたバーコードから読み取られたデータがカウンター内で表示されて、名前やアレルギーの確認に使われる。

でも、恥ずかしいものは恥ずかしい。だからウサギのようにカウンターに飛び乗るなんてことはできない。

ウサギの股間に、おかず兄がバーコードリーダーを近づけた。

「うんうん、今日も元気だね」

「起っちゃってるの、わかりますか」

「わかるよー。貞操帯、苦しそうでかわいいね」

「へへへ。あつ、サル！ ほら、サルも！ 早くご飯食べよ！」

ウサギに呼ばれ、たじろぐ。

できれば静かに見せて、静かに終わらせたかった。

「サル？ サルくん？」

「あつ……」

おかず兄に、変なあだ名を知られてしまった。知られなくなかった。おかず兄にだけは、サルなんて呼ばれたくなかった。顔がかあつと熱くなる。

「名前はサルにかすりもしないよね。あだ名？」

「あ……その……あの……」

言いたくない。話したくない。

「サル！ ほらサルもカウンターのつて！」

ウサギに言われ、ハツとして踏み台を取り出す。よじ登ってシャツをまくり上げると、おかず兄はバーコードを読み取った。

「二人とも、アレルギーなしね。おかずは普通盛り」

トレイに載せられた大きなプレート。たっぷりの千切りキャベツと二つに切られたミニトマト。そしてサクサクなトンカツ。

「おかわりしてね」

無意識に顔を上げてしまい、おかず兄と目が合った。サルは反射的に下を向き、「いただきます……」と小声で告げて先に進んだ。

できれば一人で食べたかった。けれど流れでウサギとテールに着くことになってしまった。

食べ始めてしばらくしたところで、ウサギがちらつとカウンターを振り返った。

「おかず兄ってさ、かっこいいよね」

「えっ……あ、はい……」

ウサギが、お腕をトレイに置いた。それからサルに向かって上体を伸ばし、内緒話をするように言う。

「でも中身が残念なんだった」

「え……？」

「僕たちはまだ知らないだけで、上級生にはすごいんだって」

「すごい……」

「ウン」

何がどうすごいのだろう。性格がきつくなるとか、はじめのようなことをするとか、そういうことなのだろう

うか。

「前にドSクラスの先生が、おかず兄に『お前は黙ってればモテそうなのにな』って言ってるの聞いたやつた」

「黙っていれば……」

モテそう。ということは、恋人はいないのだろうか。

それとも、ドSクラスの先生が恋人の存在を知らないだけなのか。

それに、どうして「黙っていれば」なのだろう。おかず兄は明るくて優しい人だ、と思う。

考えているうちに、ウサギが体を戻していた。トンカツをごま味噌だれにつけて頬張る。

「ね、トンカツめっちゃおいしいね」

「あっ、はい」

「敬語いらないよ？　っていうか僕の方が年下なんだから」

「えっ、あ……は、はい……」

そうだったか。自己紹介をした時は緊張しすぎて、ほとんど何も覚えていなかった。

「人見知り？」

「……はい」

「慣れてね」

「……はい」

「仲良くしてよー」

「は、はいっ！」

やっぱりウサギはいい子だな、と思う。

でも、猿のように真っ赤になった顔は見られなくなかった。

「あ！ サルくん！」

（あっ……）

夜、寮の廊下を歩いていると正面からおかず兄が歩いてきた。直線の廊下だ。逃げようがない。

「今日も学校、お疲れ様」

「あ……ありがとうございます……あの、夕飯の餃子もすごくおいしかったです」

「ありがとー。一つずつ丁寧に包んだからね！」

そうだったのか、すごいな、おいしかったなと考えながらおかず兄の足元を見る。裸足にサンダル履き。寮の中だからだろう。

「ねえ、なんでサルなの？」

「えっ……あ……あ……その……」

「ん？」

逃げられない。廊下には、今誰もいない。

「そ、その……さ、サルみたいって……」

「え、じゃあもしかしてお尻赤かったりする？」

「……え？」

「かわいいよね、お猿さん。お尻赤くて」

お尻が赤いからかわいい。初めて聞いた感想だった。

ちら、と見ると、おかず兄は満面の笑みを浮かべていた。

「サルくんのお尻、赤い？」

〃〃略〃〃

夏祭り

里実は両手を広げ、その場でぐるりと一回転した。

「うん、似合ってる」

「ほんとですか」

「かわいいよ」

「ありがとうございます！」

須坂が買ってくれた、オフホワイトの生地に紺色の帯の浴衣。

「先生はかっこいいです」

「サンキュ」

須坂は里実の帯と同じ色の浴衣で、帯は黒。

浴衣は転ぶ。そう須坂に言われていたし里実もそう思っていたけれど、校長先生やおかず兄たちが、せっかくだから夏休みを満喫しておいで、須坂先生にくっついていれば大丈夫だからと言って勧めてくれた。

そして今日、里実は生まれて初めて着た浴衣で、同じく初めて夏祭りに行く。

「あの、食堂に行ってきたもいいですか」

「食堂？ 祭りで食うぞ？」

「いえ、浴衣を見せに」

そう言うと、須坂が嬉しそうに目を細めた。

「ああ、じゃあ一緒に行こうか」

手をつなぎ、廊下に出る。

「お祭り、楽しみです！」

「そうだな。でも迷子になるなよ」

「……掴まっていいですか」

「手をつないでおけばいい」

「外なの？」

「誰も見てないよ。見られても別にいいし」

「へへ」

嬉しい。

顔がにやけてしまう。

食堂に入ると、おかず兄たちが夕食の支度にいそしんでいた。

「おかず兄、」

「あ！ 里実くん！ わ、わ、かわいい！」

「ほんとだー！」

「似合ってる似合ってる！」

他の調理員たちもカウンター側に寄ってきて、里実の浴衣姿を褒めてくれた。

「ねえねえ、浴衣ってさ——」

「アナルは舐めさせねえぞ」

「まだ言っていないよ」

「なんて言うつもりだったんだ？」

「アナル舐めやすい気がするから試させて」

「一緒にねえか！」

「違うよ！ ニュアンスが！」

「同じだ！」

「っていうかなんで須坂先生まで来たの！ 俺は里実くんに、浴衣を着たら見せに来てねって言っただけなのに！」

「……お前が見せに来てって言ったのか」

「そうだけど？ 須坂先生連れてきてとは言っていない」

須坂が黙る。

不穏な空気。

何かまずかっただろうか、とひやひやする。

須坂が里実を見た。

「あ、あの……」

「……まあいい」

「え？ なんですか」

怖い。何を言いたかったのだろう。

「いや……浴衣を見せたかって、里実の方から思ったのになって。そうやって自分の喜びとか楽しみを人に知ってほしいって気持ちが生えてきたのかと思って」

「あ……」

それで、里実が食堂に見せに行きたいと言った時に嬉しそうな顔をしたのか。

「すみません、でもみんなに褒めてもらえて嬉しいです」

「ん。そうだな」

須坂が里実の頭をくしゃりと撫でた。そうやって、気持ちにすぐに切り替えてくれる優しさ。器の大きさ。

おかず兄が身を乗り出して須坂の全身を眺めた。

「ねえ、須坂先生ってさ、着付けもできるの？」

「できるに決まってるだろ」

「着物も？」

「できるが？」

「なんで？ やっぱ『あゝれ』って悪代官ごっこするため？」

「馬鹿か？ お前は藤田並みの馬鹿か？ 陰間茶屋に行く生徒もいるんだから、うちの教師は全員着付けくらいできる」

「あー！ そっか、そっか、そうだね、たしかに。脱がせるために学んだ変態かと思ってたよ」

「ぶっ飛ばすぞ」

「でもそんな顔してるよ」

「ああ？」

「せ、せんせい……」

また二人のバトルが始まってしまう。

「ん？ ああ、悪い。さっさと祭り行こうな。混み始める前に」

里実に向けられる笑顔だけは、いつだって甘くて優しい。

歩行者天国になった大通り。その両側に、色とりどりの屋台が並んでいる。

「先生、げあらかってなんのお店ですか」

「からあげ。右から読むんだ」

「あ！ そうなんですな」

「何が食いたい？ なんでもいいぞ」

「いえ、まだどんなお店があるか……」

すごい人ごみで、ほとんど人の頭しか見えない。熱気と圧迫感、そして息苦しさまで感じるほどだった。須坂の手をぎゅっと握り、くっついて歩く。

「草履、靴擦れしたらすぐ言えよ。ちよつとでも痛いと思ったら」

「わかりました」

夏の夕方はまだ明るい。

人にぶつからないよう、体を小さくして歩く。

「うわっ！」

どんっと後ろから来た人にぶつかった。

「おっと」須坂の手が、里実の肩を支えてくれる。「大丈夫か」

「すみません」

「いいから。もつとこつち来い」

守るように肩を抱かれ、顔が熱くなる。

「せ、せんせい……」

「りんご飴あるぞ。食べるか」

「りんご飴ってなんですか」

「りんごを飴でコーティングしてあるやつ。りんご以外のものもあるから、食ってみ」

肩を抱かれたまま、道の左側に進む。

りんご飴の屋台には、数人が並んでいた。

「輝。りんごだけじゃなく、ぶどうといちごもあるぞ。」

あとキウイと——みかんも」

前に並んでいた背の高い男性が、隣の男性に話しかけていた。

「わ、悩んじゃいます」

「全部買えばいい」

「そんなに食べきれないですよ」

「袋に入ってるから持ち帰れる」

「お祭りで食べるからおいしいんだよ！　って勇気が言っていました」

「それは一理あるな」

仲良さそうに笑いながら、その前の客が去った分、場所を詰めた。里実と須坂も数歩進む。

「里実は何にする？」

「どれもおいしそうですーけど、せっかくなのでりんごがいいです。小さいやつ」

「ん」

前の二人が買い物する順番になった。ふと見ると、白い杖を持った男性が目を閉じたまま財布を出していた。

「隆司さん、おいくらですか」

5万7千字です！

どうぞよろしくお願いいたします。

セクシャルスクール完結後短編集2ーサンプルー

©gooneone (ごーわんわん)

2026/9/25

メール gooneonegooneone@gmail.com

pixiv <https://www.pixiv.net/users/19591291>

商業等ご案内 <https://it.link/gooneone>

同人配信サイトまとめ <https://it.link/gooneone2>

※すべての作品の無断複写・転載・複製を禁じます。

※作品はすべてフィクションです。実在する人物、団体等とは一切関係ありません。

※作品の利用に関して問い合わせた際、十四日を過ぎて返信がない場合でも、許可する旨の応答がない限りは一切の利用を禁じます。